研究主題：主体的、対話的で深い学びの実現を目指して（２年次）

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
２０２３．１．６
№５０　文責　荒木秀

引き出しはたくさんあった方がいい

先日、ある先生から「クラスに気になる子がいて。どう対応したらいいか困って。」と話を聞きました。私は、その話を聞いて感心しました。それは、クラスの子一人一人にしっかりと目を向けているからこその悩みであるし、その先生がその子のために、自分に何ができるかと真剣に考えていると感じたからです。「学び続ける教師」とは、まさにこういう姿なのではないでしょうか。こうやって、少しずついろいろな手立てを学んで、教師としての引き出しを増やしていくのだと思います。

多様な子ども達が増えていることは、どの先生も感じていらっしゃるのではないでしょうか？一斉授業の中で、一回の指示で、子ども達全員が動けていたはずが、最近はそうならなくなってきました。昔だったら、多少厳しくしてでも、全員が揃うように指導をしてきましたが、今は絶対にあってはいけません。国連からの、「日本のインクルーシブ教育が遅れている。」という指摘もあり、これまで以上に、通常学級の中に多様な子ども達は増えていくことでしょう。

個人的な意見としては、私はインクルーシブ教育が進んでいくことには大賛成です。先日、『みんなの学校』という映画を見たので、なおさら語りたいことはあるのですが、今日は控えます。でも、これだけは言わせてください。「**多様な子が同じ空間で学んでいるって、教師も子どももみんな引き出しを増やしていける。人間としての幅を広げていける。**」と私は感じています。ただ、こうするためには、これまでの教師としての固定観念をかなり外していかなければなりません。そのチャレンジを今年度はやってきました。先日、伊藤先生から価値づけていただいた５年生の学びも、そこと大きく関わっています。クラスのみんなが「ウェルビーイング」になれるようにするには、まだまだ道半ばですが、私も「学び続けて」いきたいと思っています。

さて、話は戻って、ある先生との話から、「気になる子への手立てをどうしたら。」なんてぼんやりと考えながら過ごしていたら、なんと印刷室に右のような本があるのを発見しました。**『新学期から取り組もう！専手必笑　気になる子への６０の手立て』**（監修：菊地省三　著者：関田聖和）子どもの特性に合わせた手立てが載っています。ぜひ、参考にされてはどうですか？ただし、**先生だけが本を読んで引き出しを増やしてもダメですよ。本人も回りの子ども達も引き出しを増やしていかなければなりません。**そのためには、どうしたらいいと思いますか？